

やろうと思えば

おはようございます。

さて、これは何のロゴでしょうか。東京オリンピックのロゴですね。オリンピックのマークが入るとエンブレムと呼ぶそうです。デザインは、組市松紋（くみいちまつもん）と呼び、江戸時代に「市松模様」として広まったチェック柄を、日本の伝統的なカラーである藍色で表現することで「日本らしさ」が表現されています。チェック柄に使われているのは形の異なる3種類の四角形が45枚。これらを組み合わせることで、国や文化、思想の違いなどを表し、それらが円を描くようにつながるデザインには「多様性と調和」のメッセージが込められているそうです。

このロゴをデザインした人は、野老（ところ）朝雄さんというデザイナーです。数年前の24時間テレビの「愛は地球を救う」のシンボルマークもデザインしたそうです。

では、このロゴは見たことありますね。本を販売する「平安堂」のロゴです。このロゴをデザインした方は、こんなロゴもデザインしていますし、このようなハワイの絵も描いています。デザイナーは原田泰治さんです。知っている人もいると思います。

松本城や善光寺の絵を描いていますし、伊賀良の佐倉神社のお祭りの絵も描いています。秋の美しい紅葉が丁寧に描かれている絵もあります。

原田さんの絵について、ご自身が語っています。「石垣は、バックの土を画面において、石を1個また1個と石屋のつもりで積み上げていく」と。また、「人物に目鼻がかかれていないのは、細かく丹念に描いた絵で、みる人は腹いっぱい。みる人に勝手に入れてもらったほうがいい」と。確かに石垣は一つ一つ色が違います。

原田さんの美術館が諏訪湖畔にあり、行ってきました。さだまさしさんが名誉館長をしていることを知りました。原田さんは、昭和15年に諏訪市に生まれましたが、1歳のとき小児麻痺（しょうにまひ）にかかり両足が不自由になりました。4歳の時に家族と一緒に開拓農民として伊賀良村（現在の飯田市北方）に移住し、中学校までの10年間を過ごしました。だから、伊賀良を故郷のように思い、描いているのです。その後、諏訪実業高校の定時制に進み、武蔵野美術大学で学んで、グラフィックデザイナーになりたいと考えました。

そして、デザイナーとして活躍しながら、平安堂のロゴをデザインしたり、村の風景を描いたりしています。私が小学校のころ、原田泰治さんが体育館で講演をしていただいたことを覚えています。そのときも、杖をついてステージに上る階段が大変そうでした。その時に聞いた話は今でも心に残っています。改めて原田さんの本を読んでみて、心に引っかかった話を紹介します。

ひとつは、「体が悪いながらも、なんでもやってみなければだめだ、負けん気でいちおう何にでもぶつかっていきましたが。」「遊びの中で、おいていかれた場所で待ちながら、仕方なく物を見ていることが多く、それが観察力となって記憶に刻みつかられていったのでした。それが、より克明に、より深く、より鮮明に脳裏に焼き付いている記憶になってよみがえってくるのです」というお話です。

もう一つは、原田さんのお父さんの話です。高台の家近くにある畑に水を引いて田にしようと考えた父は、たった一人で穴を掘り始めました。モグラのような生活が何か月も続きました。ある日大きな石に突き当たって掘り進めなくなっていたのでした。

泰治少年が「とうちゃん・・・・・・・・」と声をかけると、お父さんが「おい」振り向いてこう言いました。

「泰治、人生とはこういうものだ。しかし、絶対にだめだということはない。この石のような障害にぶつかる。しかし、冷静に考えてやれば、必ずぬけられる。やろうと思えばできないことはないんだ。いいか、泰治」足の不自由な原田少年の将来を思い、また自分自身に言い聞かせるために言ったのではないかと、原田さんは振り返っています。

原田さんは、『わたしの信州』（講談社文庫 昭和54年）という本の最後にこう書いています。

信州もどんどん変わっていく。部分でしか村を見ることができない。伊賀良の自然、少年時代の思い出を大切に、信州を描き続けようと自分自身に言い続けているのです。

また、もうじき80歳になるのに、新しいことにも挑戦していました。さだまさしさんの歌の歌詞とそれに合う絵をコラボレーションしていました。

そんな素敵な生き方に憧れます。